

# コロナ時代に師として継承すべきこと（第四回）

鷗友書道会会長 近藤 北濤



会長 近藤 北濤 氏（明治記念館にて）

人との出遭いは人生を左右する最も大きなきっかけの一つです。それが師であればなおさらです。私の書家としての人生を決定づけた師は四人おられます。その先生方から私は多くの学びを得ました。

## （二）金子鷗亭先生

顔（個性）となつております。この教えは、書にとどまらず、物事を大局で捉えることと、基礎的大切さを私の体に染み込ませてくれました。

私は今も、師から得た学びを生かし、長鋒の筆でリズム感をもつて、弾力性豊かな伸びやかな線質を第一に、現代性を意識した書作活動を継続しております。

私は師を「書」における父と尊敬し、その郷土愛に溢れた作品に憧れ、いつの日か、師の境内に少しでも近づけることを夢見ております。

また「真心をもつて指導すべし」とおっしゃる師の周囲には、いつも若者たちにぎやかな笑い声が絶えません。協調性が豊かで、しかも人間力を兼ね備えた師の指導者像が私の目標です。

文化勲章受章者であり、特別研修生であった私の師は「現代人の特色はリズムに敏感だ、書においてもこの傾向は強い。書作は表現が主体で文章内容に従属しない、そこから書の造形美というものが問題にされなければならぬ」「我々が共感を覚える書の造形美は、結果的には表現技術によって支えられた象徴性があり、その時の情趣が自然にそれを繰り出す」とされ、書家への初步的な学びとして「大字漢字の徹底学習」の必要性を説かれました。

二十代の私は、この教えるものと、来る日も来る日も六尺×二六尺のサイズに漢字二文字を書く修練を重ねました。この修練・鍛錬が今日の私の書の芯を形成し、書作の原動力となり、私の

## （二）中野北溟先生

郷土の大先輩で、わが郷土の誇りである師は、北海道羽幌町焼尻島（鮫漁で繁栄した緑豊かな孤島）の出身で、物理学を専攻、若くして札幌中学校の校長を務められた方です。師はこの環境をもとに、波濤・紺碧・広がり・共鳴性をテーマとして、大作を主とした書作で今日の地

### (三) 森淳司先生

大学時代の担任で、後に仲人をしていていただいた恩師が森教授です。師は柿本人麻呂の研究で知られた万葉学者で、歌人でもありました。

暑い夏の日、鯉が悠々と泳ぐ大きな池のある大邸宅への引っ越しを、三日間お手伝いしたことが昨日のように思い出されます。

師は無類の愛煙家で酒をこよなく愛しておられましたが、何よりも愛したのは学生たちであり、弟子でした。私は師ほど親身に面倒を見る方を知りません。学生時代も卒業した後も、常に弟子のことを気にかけておられました。ところが、師の教えは「黙して語らず」でした。師は常々「自ら学び、自ら問い、しろたへの沙羅の樹の花咲き初めて明るくなりぬ



### 沙羅の樹

庭の一隅 より (和田) 喜久子歌

自ら発してこそ物事の解決に至るのだ」とおっしゃいました。

私も弟子への思いは師のようであたっては、ワンポイントのみの指示に止め、弟子の「気づき」を待つよう、常に己に言い聞かせております。

### (四) 田岡正堂先生

師は、金子鷗亭先生の高弟として、日展会員（評議員）・毎日書道会理事・公益社団法人創設会長等々の要職にありました。

師は、時間に関して非常に厳しく、常に余裕を持って行動することを、弟子ばかりでなく自らにも課しておられました。私たち門人はこの教えに従つてまいました。このよき習慣は、教職者として大いに役立ち、私は常々「自ら学び、自ら問い、

は現在も常に余裕を持った行動に徹しております。  
私は集会時の集合時間を守りましたが、たとえ遅れても壇上から注意することは控えました。個別に、しかも時には褒め、時には厳しく注意する方が有効だと考えたからです。注意される相手の気持ちも慮ること、己の価値観を正しいからと言つてやみくもに押し付けるだけでは、人は決して感化されません。話をする世界に戻しますが、師は鷗亭先生の教えには徹底して従い、鷗亭流の繼承者として高く評価されました。大字漢字の習得のもと、漢字かな交じり文（日展では調和体）部門の作家として、旧派からも絶賛されました。この鷗亭流とも、田岡も語られ続けております。その作品を生み出すために師が書に賭けた凄まじいほどの情熱と執念を、私たち門人は間近で見続けていたのです。

私たちちは師の教えを継承すべ

く日々努力を続けてはおりますが、あまりにも師が極めた技法や境地が高いため、継承は容易ではありません。

しかしながら、少しでも師に近づこうとする努力こそが、師への恩返しだと信じております。師のような天才にはなれなくても、師の教えを受けた門人同士が力を結集し、あとに続く者たちを育て、師から受けた貴重な教えを継承していく覚悟です。

### 先生方への応援メッセージ

これまでの価値観が揺らいでいくコロナ時代に、私たちが多くの先人から得た学びを、そのまま次の世代に継承していくことは困難かもしれません。しかし、私たち指導者には、教え子たちを育て導く使命があります。そのことを肝に銘じ、「為せば成る」の精神で「今だからこそ為さねば成らぬ」ことのために、励んでまいりましょう。

四回の連載をお読みいただき、ありがとうございました。共感していただける事柄が一つでもございましたら幸いです。